

Takashi AKIYAMA Poster Museum Nagaoka

2012-10-25

APM news 073

秋山孝ポスター美術館 長岡

歴史的建造物・金庫扉と雁木のある美術館 (旧北越銀行宮内支店)



〒940-1106 新潟県長岡市宮内2-10-8
TEL 0258-39-1233

第17回美術館大学 10月6日(土) pm 3:00~4:30/受講者:44名/講師:高田清太郎、御法川哲郎、秋山孝

「新企画2013『高田清太郎の建築デザイン哲学』と『ポーランドポスターの巨匠展』について」



17回目の美術館大学が開催された。今回の美術館大学は、2013年の4~6月に開催される「高田清太郎の建築デザイン哲学」展と「ポーランドポスターの巨匠 in 長岡」展に関するお話を、高田清太郎氏、御法川哲郎氏、秋山孝館長より伺うことができた。

まず最初に「高田清太郎の建築デザイン哲学」についてお話を聞かせていただいた。高田氏はAPMサポーターズ倶楽部の会長であり、高田建築事務所の代表取締役社長である。今まで数多くの建築物を造り、まちづくりに奔走してきた。秋山館長は、高田氏をより深く理解するために高田氏のブログから重要な言葉を選び出し、「金言」と名づけた。その金言と、高田氏がこれまで手がけてきた作品(=図面、建築写真、立体模型)を展示するのが2013年最初の展覧会である。高田氏がブログを始めたのは、ブログというツールが社長の考えや経営方針を理解してもらうために重要であると進言されたからである。今回取り上げたのは10点ほどである。中でも「雪」の項目の金言が印象深い。「そもそも融雪設備の歴史は大変短い。むしろ、三国街道は屋根から下された雪をそのままにして不便をしていた、かつての雪国の都市生活を偲ぶには欠かせない要素としてとらえる方が良く思う」これは、長岡市撰田屋のまちおこし事業のひとつで「撰田屋総選挙」とうたったコンベに関するコメントの一部である。三国街道の改善、整備についてさまざまな計画案が出されたが、その中で冬期の雪対策については、ほとんどのコンベ参加者が地下水による融雪を提案した。しかし雪をただ邪魔なものとして消すことははたして正しいであろうか。雪のある風景こそが、不便さも含めて原風景なのではないか、と語った。

続いてポーランドポスターの巨匠展について、御法川氏と秋山館長からご説明いただいた。ポスターを理解するに当たって、その国の言語や文化、歴史について何年も時間をかけて研究することが重要である。美術館の役割は作品をただ展示するのではなく、研究にこそある。ポーランドのポスターにはいくつかの特色があり、そのひとつが作品としての芸術性である。合理的な考え方に支配された昨今のポスターは、さまざまな情報や、タレントの起用に終始し、「作品」とは呼べない。しかしポーランドのポスターは作家の個性が発揮され、またポーランド書体と呼ばれる美しい字体で記される情報は大変魅力的だ。たとえばマチェイ・ウルバニエツの「サーカス」があげられる。「サーカス」には日時も場所も記載されていない。サーカスを象徴する絵が描かれているだけだが、いつどこにサーカスがやってくるのかは周知の事実として認識されているのだという。

今回の美術館大学は、二つの展覧会について語っていただくという、盛りだくさんの内容であった。来年の展覧会を楽しみにしていただくためのきっかけとなれば幸いである。(APM公式ホームページより抜粋)